

△言語▽派行為論の基本構図 (1)

橋 爪 大三郎

人間の行為というものを、どのようにとらえればよいのか？人がいかにふるまうかについてなら、誰でも一応の知識をもっているにわががたい。しかし、問題なのは、明晰な方法をそなえ、確実な根拠をふまえた、論理一貫した体系的な議論を、行為に関して用意できるか、なのである。さもなければ、人間という存在者についても、また、人間があつまつて営む社会の本性についても、ひと通りの行きとどいた知をえたことには、決してならないであろう。ところが、実のところ、満足すべき行為の理論など、まだどこにも存在していない。これは驚くべきことに思われるかもしれないが、社会科学の現状とは存外その程度のものである。行為論とは、確かに、それだけ取扱いの厄介な、困難な課題である。わたしは、△言語▽派社会学の立場から、従前よりまじな行為論を構成できるのではないかと、いろいろ検討している。本稿は、先にまとめたそのひとつの試み（橋爪「一九七七b1」）を、さらに縮圧・改訂したものである。

なぜ△言語▽派行為論か？

「△言語▽派社会学」という、（たぶん）耳なれないことをば

肝腎の対象を見失ってしまったことである。

行動主義によれば、人間は未知の生体機構の一種であり、その反応（R）が行動である。生体は、それととりまく状況（S）を入力とし、それを出力（R）へと変換する機構である。この変換関係S→Rを特定するには、状況を実験的に制し、そのなかから、反応を規定している要因を分離・抽出して、因果モデルへと組みあげなければならない。このように操作的な実験が可能であることが、科学の規準であると、行動主義は考えたから、どうしてもネズミやゴキブリの行動を専ら研究することになってしまう。ふつうの人間は複雑すぎて、はなはだ実験に不向きであるからだ。こうなると、心理学とは名ばかりで、人間行動についての興味ある発言がなにひとつできなくなってしまう。

いくらなんでもこれではしょうがない、というので、新行動主義の諸分派があらわれた。これは、行動主義の方法論的規準を少し緩めに手直しするもので、操作的な手続きと間接にしか結びつかないような仮設構成体（たとえば欲求や意識）をたてることも認めよう、あるいは、反応（R）から状況（S）へのフィードバックも考慮に入れ、相互作用のなかで行動をとらえよう、とする。しかし、こうした修正も、根本のところでは行動主義のドグマを踏み出すものでないから、限界があり、モデルを複雑にした分だけほとんど説明の効率が落ちてしまうのをどうしようもない。こうして、行動主義の心理学は長らく足踏み状態をつづけている。方法の厳密な科学へと純化しようとするれば内容が貧しいものとなり、かといって、規準を緩和してモデルを複雑にすれば、たちまち非科学へ転化してしまいそうになる、という二律背反をさけられな

もちだしたので、まずこれから説明しよう。

△言語▽派社会学とは、わたしの命名によるが、さしあたり、△言語▽を鍵として社会現象を説明しようとする、特有の着眼と方法をもった一連の社会学の活動をさす、と考えておいてほしい。その源流をたどれば、ソスニール、デュルケム、レヴィ・ストロースや構造主義語潮流、チョムスキー、場合によってはマルクスから三浦つとむあたりまでを含めて考えてみることもできる。しかし、目下のところは、まとまった議論というより、単に有望な理論上の可能性（のひとつ）にすぎず、理論体系や具体的成果、学者集団といった実質を伴っているわけではない。そこでわたしは、独自に「記号空間論」という作業を、こしはらうく続けている。これは、△言語▽派社会学のプランを具体化する体系的な社会学のひとつとして構想されているが、本稿も、その作業の一環をなす。

それでは、なにゆえ社会学理論は△言語▽に着眼すべきであるのか？ 行為論に即して、考え直してみよう。

人間の挙動を科学的に説明するのは、心理学の分担ということになっている。二十世紀の心理学を導く最大の潮流は、行動主義（Behaviorism）であった。行動主義は、前世紀のウィント（Wundt）をはじめとする心理学諸流派の研究法、たとえば内観法に対する反指定として自己形成し、客観的に観察可能な資料と、それに関わる操作的な手続きとだけから、議論を組み立てようとした。このようなやり方は、当時物理学ないし自然諸科学を席巻しつつあった操作主義的科学観に、右へ倣えしたものである。だから「科学的」には違いないが、問題は、そうした方法に拘泥するあまり、

いわけだ。人間のもっとも人間らしい行為は、行動主義の検証にはかりようがないから、そもそも説明の対象ですらない。

行動主義がこのようにすっかり行き詰まっている（もっとも、当人たちは必ずしもそう思っていない）一方、それにかわるうまい行為分析も見当たらないようだ。経済行動分析とか、ごく特殊なモデルを前提するならともかく、一般に人間の行為を扱う適切な方法を発見することは、そう容易でない。社会科学が行為論を然るべく構成できないでいるとは、こうした現状をさす。

*

このような行き詰まりは、理論の外部基準のとり方がまずいためだ、と言えるだろう。どのような理論でも、自らをそれに合わせて形づくるための、外部基準（external criteria）——観察されたデータのたぐい——をもっている。検証によって肯定もしくは否定される仮説を含む命題群を論理的に組みあげた体系が、理論である。だから理論は、説明すべき現象の核心を巧みに抽出して外部基準に採用しなければならぬし、それに成功するかどうか、理論の成否のひとつの岐れ目だと言っている。ところが、行動主義は、人間の行為から人間らしいところをすっきりとりおとし、生体体の反応としてだけ抽象してしまった。こんな外部基準をたてたのでは、まともな行為論が構成できるわけがない。もし行為論として成功したいなら、人間の行為をネズミやゴキブリの行動と根本的に分かつ特徴を抽象して、理論の外部基準に据えるのが、まず第一歩である。それには、人間固有の出力に注目すればいい。それは、ことばであり、技術など、ことばと結びついた一連の諸活動であり、総じて文化、ないし△言語▽である

はずだ。△言語、▽行為論とは、このような構成をもった行為論である。

行動主義が行為論の外部基準のたて方に失敗したのは、第一に、物理学流の操作概念にこだわりすぎたこと、第二に、それを、外部基準を発見する手続きのように使ってしまったこと、第三に、それ以外の可能性を一切顧慮しなかったこと、による。こうした方法論に偏狭に固執する行動主義は、今世紀中葉以降いちぢるしく保守的にふるまいはじめ、先駆的な方法をそなえた新しい理論と衝突するようになった。そのうち、有名で注目すべき論争がふたつある。ひとつは、構造人類学との関連で争われた、レヴィ・ストロース対ホマンズ・シニダー（Levi-Strauss vs. Homans-Schneider）論争、もうひとつは、生成文法をめぐるチョムスキー対スキナー（Chomsky vs. Skinner）の論争である。厳密にいみでの論争ないし応酬だったとはいえないが、いずれも、①新行動主義対△言語▽派の、方法論上の争いであって（ホマンズもスキナーも新行動主義の頭目である）、②一九六〇年ごろ決着し、③行動主義の側が完敗した、という点で共通している。

レヴィ・ストロース対ホマンズ・シニダーの論争は、母方交叉イト婚の解釈をめぐる、『親族の基本構造』の帰結にホマンズらが噛みついて始まった。その内容は、橋爪（一九七三）、盛山（一九七八）にまとめてあり、またNeedham（1962）一九七七）にも詳しいので、委細を略すが、要するに、母方婚を心理的に（条件づけや学習といった行動主義の論理で）説明できるというホマンズの主張に対し、ニーダムが、そうした解釈は不

成しようとするなら、人間の行為の特殊なあり方——ある種の形——を巧妙に抽出しなければならない。さもないと、行動主義がそうであったように、記述の効率がいちぢるしく悪化して、理論らしい理論を作れなくなる。こうした点に鑑み、わたしは最近、『記号空間論』を場の社会理論の如くに構成しようと考えている。簡単に説明しよう。社会とは、人間諸個体（局、所場）からなるような場の全体である。諸個体は、身体として定在する点で、社会システムの基本粒子とみなしうが、実はこの身体が、ブラックホールの与える事象の地平線の如きをなす。そのため、社会は二重の現実性（double reality）として現象するほかはなく、人間の活動は行為Ⅱ表現の構造をそなえるにいたる。したがって、社会という場では、さしあたり、①自然力、②△性▽、③言語、④権力という、四つの基本的な粒子間力が作用すると考えねばならない。これら作用力は、互いに独立である。たとえば、①／②は近親、姦忌によって、①／③は恣意性の原理によって截然と隔てられるだろう（構造主義の基本テーゼ）。先のレヴィ・ストロース、チョムスキーの議論も、それぞれこうした人間の固有活動領域を他から画然するという意義があった。さらに、④の権力は、心的過程を経由する点で、暴力や物質力と区別される（吉本幻想論の主張点も、そこにある）。また、あらゆる社会現象、たとえば家族、政治、法、宗教、芸術といった諸々の固有領域や、貨幣組織、国家などは、これら作用力の複合によって捉えられるはずである。

①に対して②／④は人間固有の現象である。それら特殊な作用力は、社会を自然現象の圏域からひき剥がす。つまり、当初、自

可能で、実証的にも誤っていることを示したのである。この合意を捉えなおせば、こうだ——親族システムは、人間だけが営む社会現象の秩序であり、人間固有の出力（R）であるが、これを外部基準（説明対象）とする理解を捨てるには、行動主義より構造主義の方法のほうがはるかに有効であったこと。

チョムスキー対スキナーの論争も、ほぼ同様の構図にある。チョムスキー革命前、アメリカの学界はほぼ構造言語学一色に塗りつぶされていたが、この学派は、行動主義を標榜し、その方法論によって言語を説明すべきこと、つまり、発語（R）をその状況（S）から説明すべきことを主張する傾向にあった。スキナーの『言語行動』は、そうした試みの成功を楽観的に予見している。しかしチョムスキーは、その書評の中で、そうした試みは間違はなく破産する、と断言する。この主張には、裏付けがあった。チョムスキーはその頃、生成文法という制約モデルを創案していたのだが、このモデルを用いて、彼は、発言（R）が状況（S）に依存するような型の文法——有限状態文法——では、人間の言語をとって記述しきれないことを、証明した（チョムスキーの基本定理）。つまり、言語の無限生成能力をもつ人間の内部メカニズムは、素朴な行動主義モデルの想定よりはるかに複雑だということである。チョムスキーはここに生得の言語能力を仮設した。言語行為がすでに行動主義の分析枠をこえているなら、言語行為を含む人間の行為一般が行動主義的に捉えきれないのは当然である、と言えよう。

*

人間の行為やそれらが織りなす社会についての妥当な理論を構

然生態系から発しながらも、社会それ自身は、そこから離脱した記号的秩序において営まれるしかない。このいみで、社会は、ひとつの記号空間であり、そのような社会の秩序を説明するのが『記号空間論』なのである。

行為の統合構造仮説

『記号空間論』の内容にたちいることは描くとして、行為に焦点を絞ろう。『記号空間論』は、人間の行為に、固有の記号的秩序が存すること、のみならず、それを行為の統合構造としてとりだせることを、仮説する。

特定の行為は、社会という場の構成素として、はじめていみをもつはずである。ところで、行為を支配する規則性には、ふたつの系列をたどりうるだろう——ひとつが、行為の統合構造、他が行為の連合構造である。前者はある個体の行為連鎖に見出される秩序であり、後者は分業秩序に見合うものである。もちろん実際にはどんな行為も両者の交錯のなかで実現されてあるしかないが、それでもこのふたつを区別しておくことが重要である。従来の行為論ないし社会理論は、前者を無視し、連合構造に注意を集中させてきた。しかし、行為を行わしめる固有秩序を与えるのは、むしろ統合構造である。分業は、行為それ自体がまとまりある統合的な秩序をそなえていることを前提にして、はじめて成立するものだ。それゆえ、行為の統合構造論が、行為論の基礎にならないければならない。

行為に統合構造の存在を仮説するとは、どのような意味があるだろうか？　ごく簡単に言って、この仮説は、行為が形式的に取

扱われるべきこと、行為がある種の抽象性をそなえていること、そのため、行為は、直接観察可能な外形には還元できない抽象的な構造によってしか、理解できないこと、……を主張するものである。この仮説は、行為の動因として直接に内面的な「価値」、「欲求」、「効用」等々を想定するような仕方にくらべて、「より強い」主張を含んでいる。行動を動機づける抽象的な内面性はぎゃくに、行為の統合構造の側から、それを記述するための概念として、要請され位置づけられていくことになる。行為の統合構造仮説は、一方では、行為を妥当に記述するかどうか、という外部基準をもつことによって、実証的な理論として自らを検証していくとともに、もう一方では、個体の内面性なり心的領域なりについて、根拠のある命題を提示しようとするものだ。

『記号空間論』は、行為の統合構造について、どう考えているか？ 橋爪〔一九七七〕に暫定的に掲げてある命題群のうち、行為の統合構造に係わるものをいくつか、再録しておく。

$\begin{matrix} \wedge \\ 7 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 6 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 5 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 4 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 3 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 2 \\ \vee \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \wedge \\ 1 \\ \vee \end{matrix}$

(もっとも、行為に統合構造があるはずだとかありそうだとか予想すること、それを明示的な仮説の形に定式化することとは、別である。いうまでもなく、後者の方がはるかに強い主張であり、また難かしい。△言語▽派行為論の目標もそこにあるが、本稿はそこまでのべるにいたらない。)

われわれは、以下で、技術、失行症を例にとり、行為の統合構造仮説を根拠づけることを、試みたいと思う。

旧石器：統合構造の展開

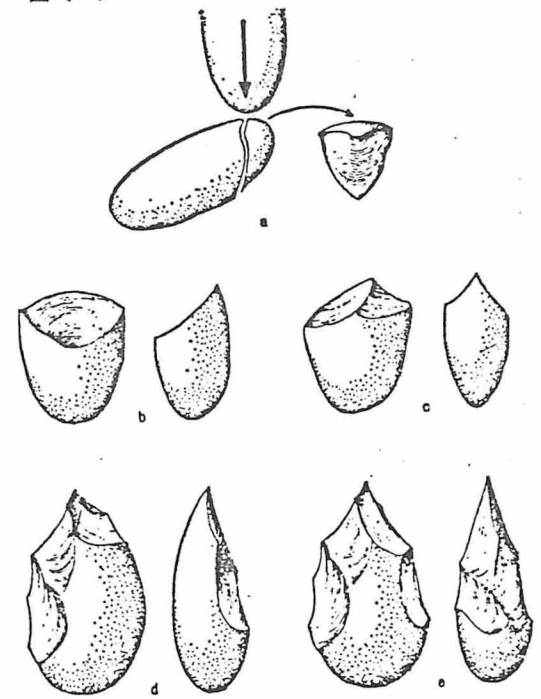
先のテーゼA3Vは、技術を、労働過程を支配するひとつの統合的な秩序として、見出すべきことを含意している。そこで、他の諸技術にまじって、最も古くから人類にあらわれた技術であるところの、石器製作を、とりあげてみよう。石器製作をとりあげるのは、化石人類の技術のうち、今日、考古学・先史人類学の研究によってその内容が実証的に明らかにになっているものが他にないという、まったく便宜上の理由による。植物、皮革、その他を素材とする加工品は、跡かたもなく消滅してしまったのだから。

フランスの人類学者ルロワグーラン（Leroi-Gourin）はその注目すべき著作のなかで、アウストラロピテクス（猿人）、原人、旧人、新人たちのうみだした旧石器文化を、大きく四つの段階に整理している。以下、Leroi-Gourin [1964/1965 = 一九七三]にしたがって、要約する。

ここで少々附書しておく。先史考古学は、先史人類の化石およびその製作物を主要な研究素材とし、先史人類の生活文化の全体像を再構成することをめざす。そこで当然、この学問は、人類が製作した人工物をそれ以外の自然物からどのように区別するのか

	第 1 段階	第 2 段階	第 3 段階	第 4 段階
	垂直の打撃 石は石器	垂直の打撃 横線方向の打撃 石核石器	垂直の打撃 横線方向の打撃 加工された石核 刮片石器	垂直の打撃 横線方向の打撃 加工された石核 刮片石器 石刃石器
石	チャップー クラクトニアン型刮片 ? ?	チャップー 両面石器 クラクトニアン型刮片 ブレイド・フレーグ 小斧 〔ラクロワール〕	チャップー 両面石器 クラクトニアン型刮片 ブレイド・フレーグ ルヴロワジアン型刮片 小斧 ラクロワール ルヴロワジアン型ポイント ノッチ 〔バグクト・ブレイド(片刃)〕 〔ピュラン〕 〔グラットワール〕	ブレイド・フレーグ 石刃と薄刃 バグクト・ブレイド(片刃) ノッチ・ブレイド 有孔燧石ポイント 有孔ポイント 幾何学的細石器 ノッチ グラットワール ピュラン 錐(ベルソワール)
骨			〔骨鏟(ボワンソン)〕	〔骨鏟(ボワンソン)〕 針 投槍 鏃 投槍器(スピ・スローワー) 有孔棒 竽 半円棒 楔 標槍
その他	多面体	多面体?	多面体 〔燧石〕 〔化石〕 〔小皿〕 〔盆〕	燧石 化石 装身具 ランプ 小皿 盆 象形芸術

図<2>



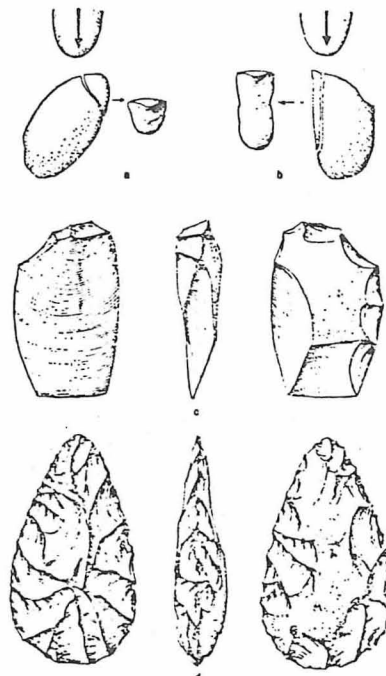
という、方法論的に重大な問題につきあたることになる。(実は、これは、人間を他の(あるいは人間以前の)動物からどう区別するか、という問題でもある。)殊に、人類の草創期にさかのぼる場合、この問題はぜひとも解決されねばならない。実際、前世紀末あたりには、第三紀層下部の岩石片のなから、鋭く尖って石器らしいものを学者が選別し、「曙石器」とであると称して陳列したこともあったらしい。(しかし今日では、石器と天然の石片とは、明確な方法論によって区別されている。たとえばどのように単純であっても、「偶然的衝撃」などでは到底説明できない定形的なものとして発見されるのが石器である。どれほど年代を遡っても、見出されるのは、このような石器か、それともただの石ころか、どちらかなのだ。

この点はいくつ々つと考えるに値するだろう。最も単純な石器を想定すれば、その石片は、どこからみても、偶然のもたらした石片と区別できないかもしれない。たまたま学者の手に入った石片一個の形状は、物理的な力学法則によって説明できるからである。しかし、その石片が石器であると考えるをえないのは、他に同様の形状をした多くの石片と一緒に発見されるからであり、この一群の石片がなす確率統計的に言ってきわめて特異な分布は、打撃を一定の角度・方向に生じさせるようなある「意図」の存在を想定しなければ、説明できないからである。ある石片が文化に属するのは、その石片が天然の石片とそれ自体において区別されるからではなくて、その石片が、人間的な行為の帰結であるから、ある意図を実現するような変形操作を施されたものであるからだ。(何らかの人工物を、自然的な諸対象と同じように、操作的にとらえようとする仕方は、すべて失敗するだろう。これはちょうど、音韻論が音声学と別な原理にもとづかねばならないのと、同じである。)

そのつぎの段階においては、これに、第二の打撃が加わってくる。ほぼ三〇〇四〇万年にわたってつづいた、前期旧石器時代とよばれるこの期間、この型の石器を拵えたのは、原人たちであったが、この段階では、獲得される石器の最終的な形態が、ますます所与の石塊からかけはなれていく。

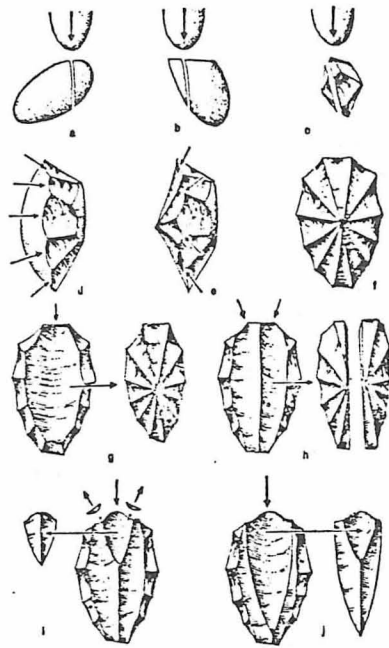
中期旧石器時代とよばれる第三の段階では、さらにもうひとつの加撃の仕方がつけ加えられる(図<4>V)。ネアンデルタール人と総称されてきた旧人の石器は、製作過程が複合の度合をつよめた結果、最終生産品は、直接石核からではなくて、剥片からえ

図<3>

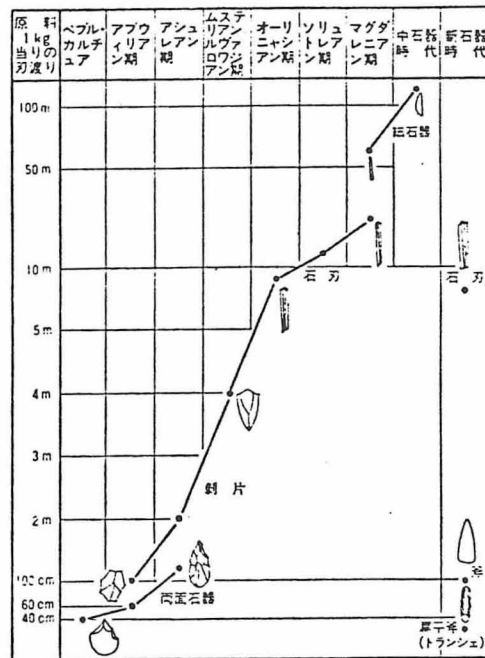


られるようになった。製作過程の全体は、多種多様な剥片石器を獲得するための、緻密に組み立てられたシステムをなす。

図<4>



表<5>



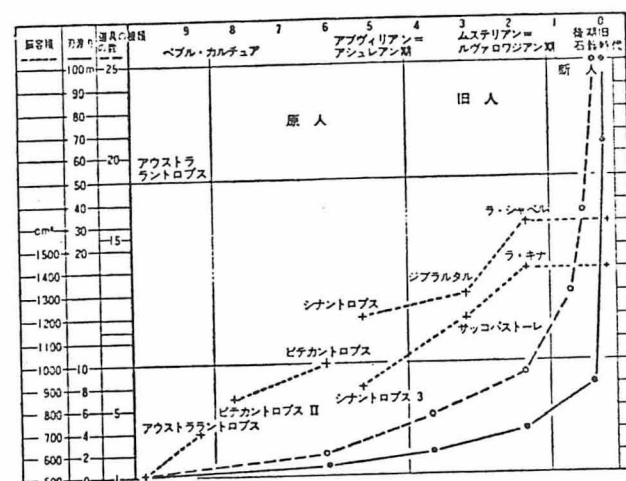
このような複合化は、いわゆる新人(クロマニヨン人)に担われるようになるや、急速にその度合をつよめ、後期旧石器時代の石刃、中石器時代の細石器文化へとつながっていく。技術進歩を、たとえば、効率の点からはかることができるとすれば、つぎに示すような図表をあらわすことに、いみがあるだろう(表<5>V)。

考古学的な証拠からみる限り、人間の象徴活動がきわめて活発になってくるのは、後期旧石器時代に入ってからであるらしい。埋葬のような、何らかの宗教的感情の存在を推測させるような遺跡は、それに先立つネアンデルタール人の最も後期の段階から、すでに知られるようになるが、これはあくまでも部分的な現象であり、今日われわれが知るような人間的諸能力の全面的な展開は、約三万年前ごろに生じたといわれる「象徴革命」にまたねばな

らないようである。技術のいちぢるしい進展と、表象能力の展開とは、密接に結びついている、と言わなければならない。

石器文化の展開は、技術に関して、いろいろのことを考えさせ

表<6>



てくれる。まず、ルロワIIグーランの言うところをきこう。
 ▲……技術というのは、一連の運動に安定と柔軟さとを同時に与える文字通りの統辞法によって、連鎖的に組織された身ぶり
 と道具のことである。動作の統辞法というのは、記憶によって提示され、脳と物質環境のあいだで生みだされたものである。
 言語活動との比較を推し進めてみても、それと同じ手続きがつねに存在している。それゆえ、複雑さの度合いや概念の豊かさの点で、技術の場合と酷似している言語活動についての仮説を、
 礫石文化からアシュレアン期にいたる技術の知識にもとづいて立てることができる。……(Leroi-Gourin[1964/1965

一九七三：一二二)
 この言説の後半は話半分にきくとしても、ルロワIIグーランが技術の実体を動作の「統辞法」(および、道具)のなかに求めているのは明らかであって、このことは八言語派行為論の前提からしても全く正当である。

石器製作の技術は、いかなる統合構造を有している、と言えるか？ 単一の打撃からなる、最も単純な工程しかもたない技術でさえも、充分複雑な動作の組合せからなる、と考えねばなるまい。まず、石塊に適切な打撃を与えるためには、石塊を固定しておいて、別の石を打ちおろさなければならぬ。このことは、右手と左手の、充分にすんだ機能的非対称性を、必要とするだろう。また、同型の石器が広範囲、長期間にわたって発見されているのだから、この動作は充分に反復され、習練をつんだ(自動化のすんだ)ものであり、しかも、個体間に継受・伝承される性質のものであったはずである。さらに、加工に先立っては、燧石を選別して運んでくる(選別しにだけていく)という作業が必要であり、また、加工のすんだあとでは、必要ならば木片などに装着した上、石器を所持携行し、適切な仕方ですれを使用する一連の過程がつづくはずである。

道具の製作過程は、そのもっとも単純な場合でも、このような行為連鎖のなかに現存する。石器の加工に係る行為の統合構造をとりだすとすれば、このような行為(ないし、動作)の連鎖のなかにあって、眼前の状況から相対的に独立した部分、しかも、いまは現前せずやがて現前する石器(ないし、それを使用する場面)の表象——ある種の抽象性、いかなれば、目的——と結びついて、

組みたてられてある部分、ということになるだろう。

技術は身体活動を統制する特定の仕方(記号的秩序)であると同時に、自然的秩序とも一切違背することがあってはならない。技術は、いわば、この両秩序の接合面に、自らをくりひろげていくのである。技術の擁する変形は、いづれも、身体と外界とをともに構成する自然的な諸秩序によって、完璧に支配されているに違いない。しかし、技術を、他の自然過程から区別しているのは、その過程が、ある抽象性ないし意図を実現するように、適切に配列された、分節された身体活動の統合構造として記述できるところにある。

技術に典型的にみられるように、行為の統合構造は、さしあたり、①身体肢節の動作の分化、②特定動作の組合わせの固定化、③状況への(相対的な)無依存性、によって特徴づけられているようにみえる。

いまひとつ、石器文化の展開から考えておくほうがいい点がある——石器の製作工程が複合化するのに要した、何十万年という途方もない年月を、どのように理解すべきか？

石器加工の工程が複合化することをおしとどめた阻害要因を想定するとすれば、それが少くとも物理・生理的な要因でありえないことは、たしかだ。石器加工は、要するに石と石とを打ちあわせる動作だけからできており、ただその組みあわせが、ちょっと複雑になっていくだけなのだから(図A2V、図A4V)。それゆえ、技術を構成する行為の統合構造の展開が、おしとどめられきわめて徐々にしか展開しなかった原因は、つぎのように考えられよう——ひとつには、身体肢節の分化をささえる生理学的変化

が生ずるのに、時間を要した。もうひとつの可能性としては、行為の統合構造を複合的に構成する(具体的には、図A4Vのように、さまざまな工程を一連の動作のなかで処理していく)にたただけの心的機制(非能力)自身が、徐々にしか高度化していかなかった——ルロワIIグーランによれば、この両者(手と頭脳)は、密接に結びついて、表裏をなす現象なのだという。彼はまた、行為の統合構造の高度化を阻害しているこの同じ要因が、言語の統合構造の複合化をも阻害したと考え、その阻害要因を、結局のところ、頭蓋部の形状に帰着させた。旧人も、頭蓋の容量(脳の重量)という点では、現生人類に劣らない。そこでルロワIIグーランは、「象徴革命」の根拠を、「前頭部の門」が外れた(頭蓋の力学的均衡が新人に至って最終的に変化した)結果、中頭部の大脳皮質が展開しえたことに、捜しあてているのである。

『記号空間論』は、いさう現生人類の心的諸能力を前提としているので、先史人類に関する思弁をめぐらす直接の必要はないが、技術の多様な展開が、完全な象徴能力の獲得されたとおぼしい時期からはじまっている点は、無視できないだろう。能力の発達するある時点まで、技術(行為の統合構造の特定のありかた)が高度化しえなかった、という事実のもつ意味を、よく反省してみれば、現にわれわれが知るようにな社会は、行為の統合構造を高度化させているような能力を前提に成立していること、すなわち、われわれの社会の行為秩序は、ある種の象徴能力(もしくは記号能力)の概念によらなければ、そもそも解きえないような水準にあること、が推論されるはずである。(未完。文献は完結時に一括して示します。)